

『ハッピー・ニュー・ビジネス』

さくら なおき

正月のこの時間、タクシーは混んでいた。

「あと四十分はかかるって：ならゆっくりお話できるわ、もうお客さんも来ないし」

ママは受話器を置くと、カウンターの泰彦の隣に腰をおろした。三次会でのスナック、ママの名前は恵子といい、昼はOLの二つの顔を持つ。高校で泰彦の二年後輩だった。

酔客が帰って二人きりになると、呼び方がママから恵ちゃんに変わり、泰彦の話は一段と熱を帯びてきた。

「バクは夢を喰うが、夢は喰い終わったらおしまいだ。だから恵ちゃん、俺は夢を与え続けるドリーム・プレゼンターになるんだ」

「で、具体的に言うとなんかこと？」

「中学校の卒業記念に、タイムカプセルを埋めたでしょう。十年後、再会したときこれを掘り出したとする。どうなる？」

「どうなるって、そりゃあ、誰しも懐かしい気持ちになるんじゃないかしら」

そのとおりとばかりに椅子をよじり、端正な恵子の横顔に向かって話を続けた。

「そうなんだ。何の変哲も無い図画や作文や写真だけど、恵ちゃんね、その何の変哲も無

い掘り出し物が、そう、まさに掘り出しモンだ。その掘り出しモンは、宝物になっていた。宝石になったんだよ」

「想い出は宝石のごとし……」

「だろう。だから俺は考えた。俺はそういう仕事をやるの。全国に取扱所を設置してさ、あなたのおきの人に、あなたの想いをタイムカプセルにして贈ってみませんか、今日という日は未来の宝づくりの日、って。自分自身に贈ってもいいんだぜ。基本コースは、五年、十年、十五年それに二十年ってね。一億の人には一億の夢がある。五年もすれば、日本中が笑顔と歓声に包まれるんだ」

泰彦の酔いは酒のせいだけではなさそうだ。

「：こういうことを考えつく泰彦さんって：

昔からちっとも変わんない」そして、一億の

人もいいけど、一人：と言いかけて恵子はこと

ばをにごし、細くしなやかな指先に目を落と

す。泰彦の無邪気で一途に思い込む姿に、過

ぎ去った学生時代の光景がよぎったのか、そ

こにはママとしての顔は消えていた。

「よし、一年の計は何とやら。桜の咲く頃ス

タートだ。恵ちゃんはスペシャルゲスト。そ

うだなあ、特別に三十年コースはどう？」

「三十年？ そんなに……それまで、とって

おきの人待っててくれるかなあ」

今年で三十路を迎える恵子。思わず口をついたことばを振り払うように席を離れる。

「でも泰彦さん、ドリームプレゼントは私の方が先輩よ：一炊の夢」

ちよっぴりママの顔を戻した恵子は、戸棚から小瓶をとりだすと泰彦に勧めた。

「酔夢のドリームか。正月の酒は利くよ。こんなところ、朝昼晩と飲んだからなあ」

「当たり！ このお酒、銘柄は『あさひるばん』って言うの。お正月限定版」

外で車の停まる音がした。

「あら、もう：来ちゃった」

恵子はゆっくりとクロゼットへ、そして手

にしたコートを泰彦の背にそっとかける。

路地では粉雪が舞い、門松は寒そうに雪ボウシをかぶり、タクシーはワイパーを忙しく動かしている。それじゃあと、背を向けた泰彦の肩越しに、恵子が優しくささやいた。

「また夢を聞かせて：ハッピー・ニュー・ビジネス」

完